

【釜山日報】2005年7月1日(金)32面

アジア人の連帯を通じたネットワーク構築の成果

韓・中・日等、11カ国のジャーナリスト・学者・NGO関係者で構成

釜山会議を終えた「アジア・リーダーシップ・フェロー」メンバー

日本の国際交流基金と国際文化会館が共同で実施



「同じアジア人として共通の痛みを持っているので団結しやすいではないか
と思います。」、「光州については知っていましたが、釜山の民主化の努力は
改めて認識しました。」

去る28～30日の2泊3日間釜山を訪問した「アジア・リーダーシップ・
フェロー」のメンバー46人は、韓国、日本、中国、インド、インドネシア、
タイ、フィリピン、シンガポール、マレーシア、ベトナム、ブータン等、アジ
ア11カ国から招請されたジャーナリスト、NGO関係者、学者等の多様な知識
人グループであった。

「アジア・リーダーシップ・フェロー・プログラム」を共同で実施している
国際交流基金（www.jpff.or.kr）と国際文化会館（www.i-house.or.jp）は、
「今年はプログラム実施10周年になるので、過去の参加者全員を再び招請す
ることになった。」と明らかにした。当初は福岡での会議だけを予定したが、
アジアの問題を共に悩み、連帯するとの意味を生かして、最も隣接した国・都
市である釜山に移動して「釜山会議」を異例的に行うことになったのである。

釜山滞在中には、非公開の会議を行う以外にも、釜山民主公園を団体で訪問する他、「歴史コース」（UN記念公園～釜山博物館～伝統茶室）と、「市民運動コース」（ムルマンガル～美しい店）等の2つのコースに分けて、一般の観光客とは違うコースでの釜山見学を行った。

「福岡・釜山会議」に参加したスリランカのチャンドリカ・セパリ（48歳・女性・スリランカ女性NGOフォーラム・コーディネーター）氏は、「釜山はもちろん、韓国訪問自体が初めてだが、美しい都市であるとの印象を受けた。」と述べながら、「何よりも、このプログラムに参加した人はそれぞれ異なる歴史的背景を持つ国から来ているが、殆んど似ている悩みをしながら同時代を生きているような気がして、活発な対話ができただのが良かった。」と所感を明らかにした。

国際文化会館のプログラム・オフィサーである島村直子氏は、「このプログラムの特徴であり目的であるのは、個人の研究活動の深化はもちろん、アジアの知的リーダーたちが対話して共通の体験を共有することによって、地域的、世界的な問題の解決のために積極的に連帯・発言できるような人的ネットワークの基盤を作っていくことだが、少しずつ可視的な成果が見え始めている。」と意義を説明した。

フェローではないが、アドバイザー（2001～2004年）として、25年ぶりに釜山を訪問して感動したという韓国出身の李鍾元（52歳・立教大学教授・国際政治）氏は、「今まで私たちは各自の問題だけに忙しかった。今からはアジアの各地域が共にしなければならないとの認識が徐々に拡大されているので、アジア各国間、アジア人同士での横の連帯を積極的に模索しながらグローバル化を議論するべきだ。」と指摘した。

なお、「アジア・リーダーシップ・フェロー」は、国際交流基金と国際文化会館が共同で毎年5～8名をアジア各国から選抜して、最長3ヶ月間日本に招へいしている。今まで13カ国から54名が参加し、その中には韓国人4名も含まれている。

金銀英記者